

# 西瓜

永井荷風

青空文庫



持てあます西瓜すいかひとつやひとり者

これはわたくしの駄句である。郊外に隠棲している友人が或年の夏小包郵便に托して大きな西瓜を一個ひとつおく饋つてくれたことがあった。その仕末しまつにこまって、わたくしはこれを眺めながら覚えず口ずさんだのである。

わたくしは子供のころ、西瓜や真桑瓜まぐわうりのたぐいを食くらうことを堅く禁じられていたので、大方そのせいでもあるか、成人の後に至つても瓜の匂を好まないたため、漬物にしても白しろ瓜りはたべるが、胡瓜きゅうりは口にしない。西瓜は奈良漬ならづけにした鶏卵たまごくらいのの大きなものを味うばかりである。奈良漬にすると瓜特有の青くさい匂がなくなるからである。

明治十二、三年のころ、虎列拉病コレラびようが兩三度にわたつて東京の町のすみずみまで蔓延まんえんしたことがあった。路頭に斃たおれ死するものの少くなかつた話を聞いた事がある。しかしわたくしが西瓜や真桑瓜を食くうことを禁じられていたのは、恐るべき伝染病のためばかりではない。わたくしの家では瓜類うちの中で、かの二種を下賤な食物としてこれを禁じていたのである。魚類では鯖さば、青刀魚さんま、鰯いわしの如き青ざかな、菓子うのたぐいでは殊に心ところてん太を嫌つて子供には食べさせなかつた。

思返すと五十年むかしの話である。むかし目に見馴れただえんけい橢円形の黄いろい真桑瓜は、  
今日こんにちではいずこの水菓子屋にも殆ど見られないものとなった。黄いろい皮おもての面に薄緑の  
筋が六、七本ついているその形は、浮世絵師の描いた狂歌のすりもの摺物にその痕あとを留めるばかり。  
西瓜もそのころには暗あん碧の皮の黒びかりしたまんまる円なもののみで、西洋種の細長い  
ものはあまり見かけなかった。

これは余談である。わたくしは折角西瓜を人からおく饋られて、何故こまったかを語るべき  
はずであつたのだ。わたくしが口にすることを好まなければ、下女に与えてもよいはずで  
ある。然るにわたくしの家には、折々下女さえない時がある。下女がいなければ、隣家  
へ饋ればよいという人があるかも知れぬが、下女さえさびしきに堪たえ兼ねて逃去するような家  
では、近隣とは交際がない。啻ただにそれのみではない。わたくしは人の趣味と嗜性しせいとの如何  
を問わずみだり濫に物を饋ることを心なきわざだと考えている。

○

わたくしはこれまでたびたび、どういうわけで妻帯をしないのかと問われた。わたくし

は生涯独身でくらそうと決心したのでもなく、そうかといって、人を煩わづらしてまで配偶者を  
 探す気にもならなかった。来るものがあつたら拒こばむまいと思ひながら年を送る中うち、いつか  
 四十を過ぎ、五十の坂を越して忽ち六十も目もく 眊しやうの間かんに迫つてくるようになった。世に  
 は六十を越してから合ごうきんの式を挙げる人もままあると聞いているから、わたくしの将来  
 については、わたくし自身にも明言することはできない。

しづかに過去を顧かえりみるに、わたくしは独身の生活を悲しんでいなかった。それと共に男女  
 同棲の生活をも決して嫌つていたのではない。今日になつてこれを憶おもえば、そのいづれに  
 も懐しい記憶が残っている。わたくしはそのいづれを思返しても決して慚ざん愧きと悔かい恨こんとを  
 感ずるようなことはない。さびしいのも好かつたし、賑にぎやかなのもまたわるくはなかった。涙  
 の夜も忘れがたく、笑の日もまた忘れがたいのである。

大久保に住んでいたところである。その頃家うちにいたお房という女とつれ立って、四谷通よつやどおり  
 へ買物に出かける。市ヶ谷 鰻まんじゅう頭だに谷の貧しい町を通ると、三月の節句に近いところで、幾  
 軒となく立ちつづく古道具屋の店先には、雛人形が並べてあつたのを、お房が見てわたく  
 しの袂たもとを引いた。ほしければ買つてやろうというと、お房はもう娘ではあるまいし、ほし  
 くはないと言つたので、そのまま歩み過ぎ、表おもてどおり通の八百屋で明日あしたたべるものを買い、

二人で交る交る坊主持ぼうずもちをして家にかえったことがある。何故なにゆえとも分らず、この晩の事が別れた後まで永くわたくしの心に残っていた。

冬の夜はしんしんとふけ渡つて、窓の外には庭の樹きを動すゆるやかな風の音が聞えるばかり。犬の声もせず鼠の音もしない。襖ふすまのあく音に、わたくしは筆を手にしたままその方を見ると、その頃家うちにいた八重という女が茶と菓子とを好みの器うつわに入れて持ち運んで来たのである。何やかやとはなしをしている中に、鐘の音が聞える。遠い目白台の鐘である。

わたくしはその辺にちらかした古本を片付ける。八重は夜具を敷く前、塵を掃出すために縁側えんがわの雨戸を一枚あげると、皎々こうこうと照りわたる月の光に、樹の影が障子しょうじへうつる。

八重はあしたの晩、哥沢節うたざわぶしのさらいに、二上りにあがの『月夜鳥つきよがらす』でも唱うたおうかという時、植込の方で烏らしい鳥の声がしたので、二人は思わず顔を見合せて笑った。その時分にはダンスはまだ流行していなかったのだ。

麻布いおりに廬いりを結び独り棲すむようになってからの事である。深夜ふと眼をさますと、枕元ガラスまどの硝子窓に幽暗な光がさしているの、夜があけたのかと思つて、よくよく見定めると、宵の中には寒月が照渡つていたのに、いつの間にか降出した雪が庭の樹と隣の家の屋根とに積つていたのである。再び瓦斯ストーブガスに火をつけ、読み残した枕頭ちんとうの書を取つてよ

みつづけると、興趣の加わるに従つて、燈火は熒々<sup>けいけい</sup>として更にあかるくなつたように思われ、柔に身を包む毛布はいよいよ暖に、そして降る雪のさらさらと音する響は静な夜を一層静にする。やがて夜も明け放れてから知らず知らずまた眠に墮<sup>お</sup>ち、サイレンの声を聞いて初て起き出る。このような気儘な一夜を送ることのできるのも、家の中<sup>うち</sup>に気がねをしたり、または遠慮をしなければならぬ者のいないがためである。妻子や門生<sup>もんせい</sup>のいないがためである。

午後<sup>ひるすぎ</sup>も三時過ぎてから、ふらりと郊外へ散歩に出る。行先さだめず歩みつづけて、いつか名も知らず方角もわからぬ町のはずれや、寂しい川のほとりで日が暮れる。遠くにちらつく燈火を目当に夜道を歩み、空腹に堪えかねて、見あたり次第、酒売る家に入り、怪しげな飯盛<sup>めしもり</sup>の女に給仕をさせて夕飯を食<sup>く</sup>う。電燈の薄暗さ。出<sup>で</sup>入<sup>はいり</sup>する客の野趣を帯びた様子などに、どうやら『膝栗毛』の世界に這入<sup>はい</sup>つたような、いかにも現代らしくない心持になる。これもわが家に妻孥<sup>さいに</sup>なく、夕飯の膳に人の帰るのを待つもののいないがためである。

そもそもわたくしは索居独棲さくきよどくせいの言いがたき詩味を那辺なへんより学び来きたったのであろう。わたくしはこれを十九世紀の西洋文学から学び得たようにも思い、また江戸時代の詩文より味来きたったもののような氣もする。わたくしはたとえ西洋の都市に青春の幾年かを送った経歴がなかったとしても、わたくしの生涯はやはり今日あるが如きものとなってしまうより外には、道がなかったように思われる。わたくしの健康、性癖、境遇、それらのものを思返して見ると、わたくしの身は世間一般の人のように、善良なる家庭の父となり得るはずはないようである。

多病の親から多病ならざる子孫の生れいづる事はまず稀であらう。病患は人生最大の不幸であるとすれば、この不幸はその起らざる以前に防止せねばならない。わたくしは自ら制しがたい猥慾と情緒とのために、幾度いくたびとなく婦女と同棲したことがあったが、避妊の方法を実行する事については寸毫すんごうも怠る所がなかった。

わが亡友の中に帚葉山人そうようさんじんと号する畸人きじんがあつた。帚葉山人はわざわざわたくしのために、わたくしが頼みもせぬのに、その心やすい名医なにかし何某博士を訪とい、今日普通に行われている避妊の方法につき、その実行が間断なく二、三十年の久しきに渉わたつても、男子の

健康に障害を来すような事がないものか否かを質問し、その返答を伝えてくれたことがあった。山人は誠に畸人であつて、わたくしの方からは是非にといつて頼むことは一向してくれないが、頼みもしない事を、時々心配して世話をやく妙な癖があつた。或日わたくしに向つて、何やら仔細らしく、真実子供がないのかと質問するので、わたくしは、出来るはずがないから確にないと答えると、「それはあなたの方で一人でそう思つていられるのじやないですか。あなた自身も知らないというような落胤があつて、世に生存していらおかしなものですな。」と言う。

「むかしの小説や芝居なら知らないこと、そんな事はある得ないはなしだ。」とわたくしは重ねて否定したが、しかし人生には意表に出る事件がないとも限らぬから、わたくしは帚葉山人が言つた謎のような言葉を、そのまま茲に識して置くのである。



繁殖を欲しなければ繁殖の行為をなさざるに若くはない。女子を近づけなければ子供のできる心配はない。女子を近づけながら、しかも繁殖を欲しないのは天理に反っている。

わたくしはかつて婦女を後堂こうどうに蓄たくわえていたころ、絶えずこの事を考えていた。今日にあつても、たまたま蘭燈らんとうの影暗きところに身を置くような時には、やはりこの事を考える。繁殖を望まずしてその行為をなすは男子の弱点である。無用の徒事である。悪事である。しかし世に徒事の多きは啻ただにこの事のみではない。酒を買つて酔を催すのも徒事である。酔うて人を罵るに至つては悪事である。烟草を喫するのもまた徒事。書あがなを購つて読まざるもまた徒事である。読んで後記憶せざればこれもまた徒事にひとしい。しかしながら為政者のなす所を見るに、酒と烟草とには税を課してこれを人に買わせている。法律は無益の行動を禁じていない。繁殖を目的とせざる繁殖の行為には徴税がない。人生徒事の多きの中に、避妊と読書との二事は、飲酒と喫烟とに比して頗廉価すこふけんかである。避妊は宛ら選挙権の放棄と同じようなもので、法律はこれを個人の意志に任せている。

選挙にはむずかしい規定がある。一たびこれに触れると、忽縲たちまゐいせつ紲はすかしめの辱を受けねばならない。触さわらぬ神に祟たたりなき諺ことわざのある事を思えば、選挙権はこれを棄てるに若くはない。

女子を近づけ繁殖の行為をなさんとするに当っては、生れ出づべき子供の将来について考慮を費さなければならない。子供が成長した後、その身を過ち盗賊となれば世に害を<sup>のこ</sup>貽す。子供が将来何者になるかは未知の事に属する。これを憂慮すれば子供はつくらぬに若くはない。

わたくしは既に中年のころから子供のない事を一生涯の幸福と信じていたが、老後に及んでますますこの感を深くしつつある。これは戯語でもなく諷刺でもない。窃<sup>ひそか</sup>に思うにわたくしの父と母とはわたくしを産んだことを後悔<sup>こうかい</sup>しておられたであろう。後悔しなければならぬはずである。わたくしの如き子がいなかったなら、父母の晩年はなお一層幸福であつたのであろう。

父と母とは自分たちのつくつたものが、望むようなものに成らなければ、これを憎むと共に、また自分たちの薰陶<sup>くんとう</sup>の力の足りなかったことを悲しむであろう。猫が犬よりも人に愛せられないのは、犬のように柔順でないからである。わたくしの父はわたくしが文学を修めたことについて、いかに痛嘆しておられたかは、その手紙の外には書いたものが残っていないので、今これを詳<sup>つまびらか</sup>にすることができない。しかし平生<sup>へいぜい</sup>儒学を奉じておられた事から推量しても、わたくしが年少のころに作つた『夢の女』のような小説をよんで、喜

ばれるはずがない事は明である。あきらか

父は二十余年のむかしに世を去られた。そして、わたくしは今やまさに父が逝ゆかれた時の年齢に達せむとしている。わたくしはこの時に当って、わたくしの身に猫のような陰忍な児このないことを思えば、父の生涯に比して遙に多幸であると思えない。もしもわたくしに児があつて、それが検事となり警官となつて、人の罪をあばいて世に名を揚げるような事があつたとしたら、わたくしはどんな心持になるであらう。わたくしは老後に児孫じそんのない事を以て、しみじみつくづく多幸であると思わなければならない。

## ○

文学者を嫌うのも、検事を憎むのも、それは各人の嗜性しせいに因よる。父の好むところのものは必しも児のよろこぶものではない。嗜性は情に基くもので理を以て論すべきではない。父と子と、二人の趣味が相異なるに至るのは運命の戯たわむれで、人の力の及びがたきものである。

大正十二年の秋東京の半なかばを灰にした震災の惨状と、また昭和以降の世態人情とは、わたくしのような東京に生れたものの心に、釈しゃく氏のいわゆる諸行無常の感を抱かせるに力の

あつた事は決して僅少ではない。わたくしは人間の世の未来については何事をも考えたくない。考えることはできない。考える事は徒勞であるような気がしている。わたくしは老後の余生を偷むぬすについては、唯世の風潮に従つて、その日その日を送りすごして行けばよい。雷同し謳歌して行くより外には安全なる処世の道はないように考えられている。この場合わが身一つの外に、三界さんがいの首枷くびかせというものがないことは、誠にこの上もない幸福だと思わなければならない。

## ○

わたくしの身にとつて妻帯の生活の適しない理由は、二、三に留とどまらない。今その最も甚しきものを挙げれば、配偶者の趣味性行よりもむしろ配偶者の父母兄妹との交際についてである。姻戚いんせきの家に冠婚葬祭の事ある場合、これに参与するくらいの事は浮世の義理と心得て、わたくしもその煩累はんるいを忍ぶであろうが、然らざる場合の交際は太抵厭いとうべきものばかりである。

行きたくない劇場に誘さそい出されて、看みたくない演劇を看たり、行きたくない別荘に招待

せられて、食べたくない料理をたべさせられた挙句、これに対して謝意を陳べて退出するに至っては、苦痛の上の苦痛である。今の世を見るに、世人は飲食物を初めとして學術文芸に至るまで、各人個有の趣味と見解とを持つてゐることを認めない。十人十色の諺のすることは知つてゐるらしいが、各自の趣味と見識とはその場合場合に臨んでは、忍んでこれを棄てべきものと思つてゐるらしい。さして深甚の苦痛を感じずに捨てることができるものと思つてゐるらしい。飲めない酒もそういう場合には忍んで快く飲むのが、免れがたき人間の義務となしてゐるらしい。ここにおいてか、結婚は社交の苦痛を忍び得る人にして初めてこれを為し得るのである。社交を厭うものは妻帯をしないに越したことはない。わたくしは今日まで、幸にしておのれの好まざる俳優の演技を見ず、おのれの好まざる飲食物を口にせずしてすんだ。知人の婚礼にも葬式にも行かないので、齒の浮くような祝辞や弔辞を傾聴する苦痛を知らない。雅叙園に行つたこともなければ洋樂入の長唄を耳にしたこともない。これは偏に鰥居の賜だといわなければならぬ。

森鷗外先生が『礼儀小言』に死して墓をつくらなかった学者のことが説かれている。今わたくしがこれに倣<sup>なら</sup>つて、死後に葬式も墓碣<sup>ぼけつ</sup>もいらないと言ったなら、生前自ら誇つて学者となしていたと、誤解せられるかも知れない。それ故わたくしは先哲の異例に倣うとは言わない。唯死んでも葬式と墓とは無用だと言つておこう。

自動車の使用が盛になつてから、今日では旧式の棺桶<sup>かんおけ</sup>もなく、またこれを運ぶ駕籠<sup>かご</sup>もなくなつた。そして絵巻物に見る牛車<sup>ぎつしや</sup>と祭礼の神輿<sup>みこし</sup>とに似ている新形の柩車<sup>きゆうしや</sup>になつた。わたくしは趣味の上から、いやにぴかぴかひかっている今日の柩車を甚しく悪<sup>にく</sup>んでゐる。外見ばかりを安物で飾っている現代の建築物や、人絹<sup>じんけん</sup>の美服などその趣を同じくしているが故である。わたくしはまた紙でつくつた花環<sup>はなわ</sup>に銀紙の糸を下げたり、張子<sup>はりこ</sup>の鳩をとまらせたりしているのを見ることに、わたくしは死んでもあんな無細工<sup>ぶさいく</sup>なものは欲しくないと思つてゐる。白い鳩は基督教<sup>キリストきよう</sup>の信徒には意義があるかも知れないが、然らざるものの葬儀にこれを贈るのは何のためであらう。

元来わたくしの身には遵<sup>じゆんぽう</sup>奉<sup>ほう</sup>すべき宗旨<sup>しゆうし</sup>がなかつた。西洋人をして言わしめたら、無神論者とか、リール・パンサウルとか称するものであらう。毎年十二月になると東京の町々には耶蘇降誕祭<sup>ヤソこうたんさい</sup>の贈物を売る商品の広告が目につく。基督教の洗礼をだに受け

たことのないものが、この贈物を購あがない、その宗旨の何たるかを問わずして、これを人に贈る。これが今の世の習慣である。宗教を輕視し、信仰を侮辱することもまた甚しいと言わなければならない。

わたくしは齟齬ちようしんのころ、その時代の習慣によつて、夙はやく既に『大学』の素読そどくを教えられた。成人の後は儒者の文と詩とを誦しやうすることを娛たのしみとなした。されば日常の道德も不知不識しらずしらずの間に儒教に依よつて指導せられることが少くない。

儒教は政治と道德とを説とどまくに止つて、人間死後のことには言及んでいない。儒教はそれ故宗教の域に到達していないものかも知れない。しかしこの問題については、わたくしは確乎とした考を持つていない。今日に至るまでこれを思考することができなかったとすれば、恐おそくは死に至るまで、わたくしは依然として呉下ごかの旧阿蒙きゆうあもうたるに過ぎぬであらう。

わたくしは思想と感情においても、両ふたつながら江戸時代の学者と民衆とのつくつた伝統に安んじて、この一生を終る人である。一たび伝統の外に出たいと願つたこともあつたが、中途にしてその不可能であることを知つた。わたくしをして過去の感化を一掃することの不可能たるを悟さとらしめたものは、学理ではなくして、風土氣候の力と過去の芸術との二ツであつた。この経験については既に小説『冷笑』と『父の恩』との中に細叙してあるから、

ここに贅<sup>ぜい</sup>せない。

毎年冬も十二月になつてから、青々と晴れわたる空の色と、燈火のような黄いろい夕日の影とを見ると、わたくしは西洋の詩文には見ることを得ない特種の感情をおぼえる。クリスマスの夜の空に明月を仰ぎ、雪の降る庭に紅梅の花を見、水仙の花の香をかぐ時には、何よりも先に宗<sup>そう</sup>達<sup>たつ</sup>や光<sup>こう</sup>琳<sup>りん</sup>の筆致と色彩とを思起す。秋冬<sup>こうとう</sup>の交、深夜夢の中に疎雨<sup>はるば</sup>斑々として窓を撲<sup>う</sup>つ音を聞き、忽<sup>こつ</sup>然<sup>ぜん</sup>目をさまして燈火の消えた部屋の中を見廻す時の心持は、木でつくつた日本の家に住んで初て知られる風土固有の寂<sup>せき</sup>寥<sup>りょう</sup>と恐怖の思である。孟<sup>もう</sup>宗<sup>そう</sup>竹<sup>ちく</sup>の生<sup>おい</sup>茂<sup>しげ</sup>った藪<sup>やぶ</sup>の奥に晩秋の夕陽<sup>ゆうひ</sup>の烈しくさし込み、小鳥の声の何やら物<sup>もの</sup>急<sup>せわ</sup>しく聞<sup>き</sup>きなされる薄暮の心持は、何に譬<sup>たと</sup>えよう。

深夜天井裏を鼠の走り廻るおそろしい物音に驚かされ、立って窓の戸を明けると、外は昼のような月夜で、庭の上には樹の影が濃くかさなり、あたり一面見渡すかぎり虫が鳴きしきつてゐる。これらの光景とその時の情趣とは、ピエール・ロッチがその著『お菊さん』の中に委<sup>くわ</sup>しく記述している。雨の小息<sup>こゝろ</sup>みもなく降りしきる響を、狭苦しい人力車の幌<sup>ほろ</sup>の中に聞<sup>き</sup>きすましながら、咫尺<sup>しせき</sup>を弁<sup>わ</sup>ぜぬ暗夜の道を行く時の情懷を述べた一章も、また『お菊さん』の書中最も誦<sup>しょう</sup>すべきものであらう。

わたくしは今日でも折々ロツチの文をよむ。そして読むごとに、わたくしが日本の風土氣候について感ずる所は悉くロツチの書中に記載せられている事を知るのである。ロツチが初て日本に來遊したのは、それが日光山の記に、上野停車場を發した汽車が宇都宮までしか達していない事が記されているので、明治十六、七年のころであつたらしい。当時ロツチの見た日本の風景と生活にして今は既に湮滅して跡を留めざるものも少くはない。ロツチの著作はわたくしが幼年のころに見覺えた過去の時代の懐しき紀念である。長煙管<sup>ながギセル</sup>で灰吹<sup>はいふき</sup>の筒を叩く音、団扇<sup>うちわ</sup>で蚊を追う響、木の橋をわたる下駄の音、これらの物音はわれが子供の時日々耳にきき馴れたもので、そして今は永遠に返り來ることなく、日本の国土からは消去つてしまつたものである。

英国人サー・アーノルドの漫遊記、また英国公使フレザー夫人の著書の如きは、共に明治廿二、三年のころの日本の面影を窺<sup>うかが</sup>わしめる。

わたくしはラフカヂオ・ハーンが『怪談』の中に、赤坂紀の国坂の暗夜のさま、また市ヶ谷<sup>こがや</sup>瘤<sup>こぶ</sup>寺<sup>でら</sup>の墓場に藪蚊<sup>やぶか</sup>の多かつた事を記した短篇のあることを忘れない。それらはいずれも東京のむかしを想起させるからである。



わたくしはつらつら過去の生涯を回顧して見ると、この六十年の間、わたくしの思想と生活との方向を指導し来<sup>きた</sup>つたものは、支那人と西洋人との思想であつた。支那の思想は老荘と仏教とを混和した宋以後のものである。西洋の思想は十九世紀のロマンチズムとそれ以後の個人主義的芸術至上主義とである。わたくしの一生涯には独特固有の跡を印するに足るべきものは、何一つありはしなかつた。

日本の歴史は少年のころよりわたくしに對しては隱棲<sup>しじょう</sup>といい、退嬰<sup>たいえい</sup>と称するが如き消極的処世の道を教えた。源平時代の史<sup>し</sup>乗<sup>じょう</sup>と伝奇とは平氏の運命の美なること落花の如くなることを知らしめた。『太平記』の繙<sup>はん</sup>読<sup>どく</sup>は藤原<sup>ふじわらの</sup>藤房<sup>ふじふさ</sup>の生涯について景仰<sup>けいこう</sup>の念を起させたに過ぎない。わたくしはそもそもかくの如き觀念をいずから学び得たのであらうか。その由<sup>よ</sup>つて来るところを尋ねる時、少年のころ親しく見聞した社会一般の情勢を回顧しなければならぬ。即ち明治十年から二十二、三年に至る間の世のありさまである。この時代にあつて、社会の上層に立つていたものは官吏である。官吏の中その勲功を誇つていたものは薩長の士族である。薩長の士族に随従<sup>いさぎよ</sup>することを屑<sup>くせ</sup>しとしないものは、

悉く失意の淵に沈んだ。失意の人々の中には董狐の筆を振って縲紲の辱に会うものもあり、また淵明の態度を学んで、東籬に菊を見る道を求めたものもあった。わたくしが人より教えられざるに、夙く学生のころから『歸去來の賦』を誦し、また『楚辭』をよまむことを冀つたのは、明治時代の裏面を流れていた或思潮の為すところであらう。栗本鋤雲が、

門巷蕭条夜色悲  
〔門巷は蕭条として夜色悲しく〕

鵲 声在月前枝  
鵲の声は月前の枝に在り

誰憐孤帳寒檠下  
誰か憐まん孤帳の寒檠の下に

白髮遺臣読楚辭  
白髮の遺臣の楚辭を讀めるを

といった絶句の如きは今なお牢記して忘れぬものである。

○

歐洲の乱が平定し仏蘭西の国土が独逸人の侵略から僅に免れ得た時、わたくしは年まきに強仕に達しようとしていた。それより今日に至るまで葛裘を變ること二十たび

である。この間にわたくしは西洋に移り住もうと思立って、一たびは旅行免状をも受取り、汽船会社へも乗込の申込までしたことがあった。その頃は歐洲行の乗客が多いために三カ月位前から船室を取る申込をして置かねばならなかったのだ。わたくしは果してよくケール先生やハーン先生のように一生涯他郷に住み晏<sup>あんじよ</sup>如としてその国の土になることができるであろうか。途中で帰りたくなりはしまいか。瀕死の境に至っておめおめ帰りたくなるような事が起るくらいならば、移住を思立つにも及ぶまい。どうにか我慢して余生を東京の町の路地裏に送った方がよいであろう。さまざま思悩<sup>はて</sup>んだ果は、去るとも留<sup>とどま</sup>るとも、いずれとも決心することができず、遂に今日に至った。洋行も口にはいいやすいが、いざこれを実行する段になると、多年住みふるした家屋の仕末<sup>しまつ</sup>をはじめ、日々手に触れた家具や、嗜読<sup>しどく</sup>の書をも売払わなければならない。それらの事は友人にでも託すればよいという人もあろうが、一生還<sup>かえ</sup>つて来ないつもりで出掛けるのに迷惑と面倒とを人にかけるのは心やましいわけである。出発の間際に起る繁雑な事情とその予想とがいつも実行を妨げてしまふのであった。人間も渡鳥のように、時節が来るや否や、わけもなく旧巢<sup>ふるす</sup>を捨てて飛去ることができたなら、いかに幸であつたろう。

昭和十二年丁丑四月稿



# 青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〇五」岩波書店

1981（昭和56）年11月～1982（昭和57）年3月

※「漢詩文の訓読は蜂屋邦夫氏を煩わした。」旨の記載が、底本の編集付記にあります。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年5月28日作成

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 西瓜

永井荷風

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>